

〈研究余滴〉

僥倖もあって

荒 又 重 雄

(釧路公立大学学長)

1993年から1995年にかけて、わたくしたちの日ロ合同チームは、ハバロフスク市の労働者の労働に対する態度に関する、最大年には750人から回答を得たアンケート調査と、同じハバロフスク市で同じく750人から回答を得た、企業民営化バウチャーの利用法に関するアンケート調査を成功させて、とりあえず、1996年初までに、限定配布の印刷物の形で基礎的な数値を公表し、1993年11月にホノルルで開かれたAAASSの大会で、調査の存在を公表して来ました。

残念ながら、まだ、研究成果として広く世に問うところまで整理が進んでいないのですが、文部省科学研究費補助金の助成を受けた国際共同研究で、日本側メンバーには、小樽商科大学の小田福男教授、明治大学の加藤志津子助教授、北海道大学スラヴ研究センターの望月喜市教授、神戸大学の奥林康司教授および大津定美教授がおられます。

政府が実施する調査と比べるとはなはだ小規模ながら、研究者が全くアカデミックな作業として実施するものとしては決して恥ずかしいとはいえぬ量のデータを、委託調査ではなく、計画から調査の実施、結果の整理に至る全過程についてチームの研究者が責任をもつ状態で、第1次的資料として取得したものであります。ハバロフスクの代表的な工場をいくつか選び、そこでそれぞれ幾つかの職場（ツエッフ）に出勤しているものの出来るだけ全員から、研究員が直接聞き取りましたし、また、民有化バウチャー利用調査に関しても、ハバロフスク市の選挙人台帳からランダム・サンプリング取り出した対象から、調査員が聞き取りました。

この研究成果にいたるわたくし個人の努力と、チームが出会った僥倖を、本当に研究余滴として、述べてみたいと思います。

この研究に取り掛かる以前のわたくし自身は、主に理論研究者、少々歴史研究者といったところで、世に比較的広く読んでいただいたわたくしの研究は、理論に関するものであり、わたくしが博士号を出して戴いた時の研究は、『ロシア労働政策史』でありました。この研究は、ソヴィエト革命以前の帝政ロシアにおける労働政策に関するものです。

この研究をまとめた後、わたくしは研究をソヴィエト・ロシア時代に下ろしてみたいと志しましたが、ついに成りませんでした。帝政ロシア時代に関するソヴィエト歴史学者の叙述は、結論部分ではいささかステレオ・タイプでしたが、歴史学者であるかぎり史料に基づかなくってはならなかったし、その史料は、今になっては孫引きの謗りを免れないにしても、わたくしが独自に彼ら以上の何かを読み取る可能性を与えてくれていました。わたくしがその後の時代の資本主義社会の中で生きているからです。ところが、ソヴィエト時代に下ろしてみようとしたら、研究は一步も進まなくなりました。わたくしは、自慢ではないが、ソヴィエト歴史家が書くままに口移しに何かを言うほど無知では、すでにありませんでした。しかし、それとは違った真実を読み取り叙述するほど、知識も体験も無かったのです。すでに若くはないわたくしは、豊かでもない生活を切り詰めてそのころに買い集めた文献を、先日、そっくり韓国の延世大学図書館に寄贈しました。

恥ずかしいけれども、もう少し真実を言わなくてはなりません。一つには、かれらが書けないていることを見抜き、個々人の学者から本音を聞き取るには、わたくしの語学力が、不足でした。もう一つには、そこには何か良いものがあるに違いないと言う善意の願望が、わたくしを金縛りにしていたことです。何も悪いことをしていないのに、悪うございましたといって、黙ってスターリンに銃殺されたブハーリンなどと共通する心情です。

お若い世代から、ただ哀れまれるだけでは少しまずいので、ちょっとだけ言い訳しておきますと、第二次世界大戦が終わった時点で、古事記・日本書紀の記述をそのままに歴史と受け止め、日本の軍歌を歌って育ち、やがては神風特攻隊になるのだと思っていたわたくしたち世代には、戦時下に作られていたソヴィエト歌謡は、はるかに豊かな人間性を感じさせるものでありました。

研究が進まないでいる中でも、時代の方は急速に進展しました。遅れたところは隠しておいて、とにかく成功しているところだけ見せようという宣伝、アンドレ・ジッドが批判的証言を残したような、事実と証言の今となっては素朴な組み合わせから、積極的なウソと隠しよ
うのない真実の、おぞましい組み合わせが生まれ出て、ついにわたくしたちにも見えるようになったのです。ニューヨーク・タイムスの記者であったヘドリック・スミスのルポルタージュが、わたくしには大きい影響をもちました。

現代ロシアを分析する理論装置に、遅ればせながら多少の勘を持つようになったわたくしは、ペレストロイカの時代に入って変身しました。生身のロシア人たちと友人になろうと思い始めたのです。つてを求めてわたくしが極東ロシアに渡ったのは1985年でした。閉鎖された極東に暮らしていた相手方も、わたくしたち日本人と付き合うという希有の機会を通して、遠くアメリカにまでいたる外の世界を感じ取ろうと、必死のようでした。その真剣さは、わたくしの心底を揺るがしました。伝統的日本人であるわたくしは、彼女（たち）を思って突然に歌人になりました。〈烈風に樹木萎え伏す海辺にも咲きゐたりしか紅き撫子〉〈シベリアのそのまた涯の海辺にてデカブリストカの夢いづくへか〉〈腰高くとゆたい去りしかの女の瞳にひそむ淡き憂いの〉〈海原の彼方に青きあくがれに焦がるる友のあやにうつつに〉

1979年に在外研究費をもらって、また極東へ行き、それ以来、1週間から2週間の滞在を1989年、1991年、1993年、1994年、1995年と、全部で7回繰り返しました。その毎회가、個人の研究者が観光ではなくてロシアを訪問すると言うことになると、ヴィザをとって彼の地に到着すること自体、大変な事でありまして、向こうの空港に着いてロシアの友人たちの顔を見たときほっとして疲れが出て、今度は何を調べたいのだ、と聞かれても、まあちょっと待ってくれよ、といったような塩梅でした。そうこうしているうちに、ロシアの友達の数も増えて来て、それぞれの人々の性格や学問的関心のありかたなどが見えて来ました。頭の切れる人もいれば、労を厭わず経験的データを集める人もいます。実務を誠実にこなす人もいます。どういうことを研究するためにだれと組んだらよいのか判って来ました。そして、冒頭の研

究のチームも組めたのです。

僥倖についても申し添えます。折から企業の株式会社化が進展中、また戦後日本の経済的成功がロシア人たちにも広い関心を引いているという事態の中で、われわれの調査が始まりました。新しい経営陣にとって、調査への協力についていちいち上部にお伺いを立てる必要はないし、日ロ共同研究が自分たちの経営に何か参考になるかもしれない、との期待がありました。作業現場に入って聞き取りをしたのですが、経営の改革が進む中で、操業率が軒並みに低下し、現場は暇で、一人から20分とか30分とかかけても、作業に悪影響が出なかったわけです。おまけに、ルーブリは安くなり円は高くなり、わたくしたちの持ち込んだささやかな研究費は、大いに力を発揮したのでした。

この僥倖は、大きな意味もっています。最近ロシアでは、貿易が自由化するなかで、人々は輸入消費材を多用するようになっていきます。一体どうやってそれを買う外貨を手に入れているのでしょうか。極東の場合、わたくしの直感では、海産物を日本人に売った金に違いない、となります。しかし、学問的な証拠はなかなか見つかりません。関連する日本人ビジネスマンに聞くと、表に出ているのはカニを売って得た金の数パーセントのくらいでは、と言いますし、ディーラーの車置き場から高級車をクレーンで吊り上げて盗んで行く日本側業者がいるとのことですから、見当は狂っていないなど見通してはいますが、それ以上深入りして調べると、わたくしの命が危うい。つまり、経済資料に登録できるような第一次資料を獲得することは、なかなかもって難しいのです。

さて、研究の成り立ちを縷々述べて来ましたように、経済資料として国際的な次元で登録されてしかるべきデータは現存しております。ところが、わたくしたちが資料を獲得したことと、それを学会に登録出来る形に整えることとの間には、なお越えるべき距離があります。わたくしが中間的な暫定的な報告として、関係者に配布した印刷物は、未だ全くの非公式の私文書に止まるのでありまして、無視されたらそれっきりのものです。どのように資料に登録すべきであるのか、登録可能なようにするために、どのように研究者に助言すべきであるのか、皆様方のサイドでもそれを考えていただけるとうれしく存じます。